

## 木古内町ひじきプロジェクト始動

### 〇はじめに

ヒジキは日本人にとって馴染み深い食材であり、ひじき煮は和食の定番メニューです。日本では主に長崎県や千葉県などで生産されていますが、国内で消費されているヒジキの多くが韓国や中国からの輸入品です。ところで北海道でもヒジキが生産されていることはご存じでしたか。北海道南部、津軽海峡に面した木古内町では、天然のヒジキが収穫されています。その生産量は決して多くはありませんが、貴重な水産資源の一つと言えます。昨今、北海道では高水温化などの影響によるコンブの減産が懸念されています。一方、ヒジキは暖海性の海藻であるため、その影響を上手く利用できるかもしれません。現在、北海道産ヒジキの安定的な生産と地域ブランド化を目指し、木古内町を中心に上磯郡漁業協同組合、株式会社エコニクス、渡島地区水産技術普及指導所、函館水産試験場が連携して基礎研究と養殖試験を開始しました。

### 〇ヒジキとは

ヒジキ *Sargassum fusiforme* (Harvey) Setchell は、コンブと同じ褐藻類に分類されます (吉田 2003)。雌雄異株の海藻で、成熟後は藻体の大部分が枯れて、流出します。岩の表面に着生し、干潮時には干出し、満潮時には水没するような場所 (潮間帯下部) に生育します (写真1)。

日本では北海道南部、本州太平洋岸および日本海岸中南部、四国、九州に分布し、北海道では道南の離島、渡島半島南東部の恵山岬から松前町を経て後志南部の弁慶岬まで分布するとされます (福原 1959、木下 1935)。



写真1. 潮間帯の岩盤場に密生するヒジキ(2015年10月22日撮影)。

### 〇ヒジキ養殖の試み

ヒジキ養殖の基礎技術は他県で既に開発されており、まずはこれを基にして試験的養殖に着手しました (例えば、伊藤 2013)。しかし、北海道はヒジキ養殖が行われている九州や四国などより寒冷であり、漁場環境は大きく異なります。そのため、試験を進めながら少しずつ養殖方法を改良するとともに、養殖開始時期や収穫時期をじっくりと見極めたいと考えております。

まず、2015年8月に上磯郡漁業協同組合ウニ種苗センターで第1回目のヒジキ人工種苗生産が実施されました。採苗は成功しましたが、培

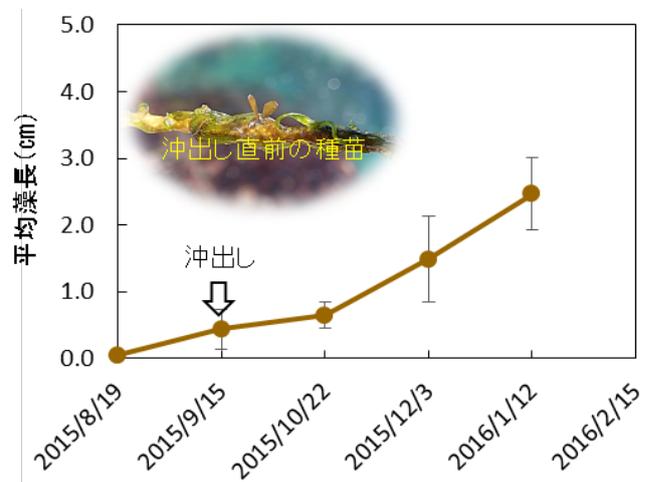


図1. 2015年9月に沖出された人工種苗の生長量。

養開始から2週間経過した頃から種苗が脱落しはじめたため、2015年9月中頃から木古内町の釜谷漁港内に敷設した養殖施設での育成に移行し、定期的に生育状況を観察することにしました。2016年1月の調査時には、藻長がおよそ3cmになり(図1)、一目でヒジキとわかる形に生長しました(写真2)。今後、採苗器の改良、種苗サイズの最適化、種苗沖出しのタイミングを計ることによって種苗の脱落を防ぐ手法を検討します。他に、天然のヒジキ幼体を種苗として養殖施設に設置することで、生長を促進させられるかどうかとも試験中です。



写真2. 養殖試験中の種苗(2016年1月12日撮影)。

### ○養殖場所の選定

現在、養殖試験は木古内町の釜谷漁港内で実施していますが、天然種苗の生長は野生株に比べて遅れる傾向が見られました。養殖施設に設置した水温計の記録から11月中旬以降、港湾内の水温は外海に比べて2~3℃程度低く推移していることがわかりました(図2)。これは気温、降雪が漁港内の水温に影響を及ぼしていると考えられます。養殖している水深は浅く、光は十分に届いていることから、水温の変化が生長に影響を及ぼしているものと推察されます。今後は、水温変動の小さい漁港外か、海水交換のよい漁港での養殖試験を実施する予定です。

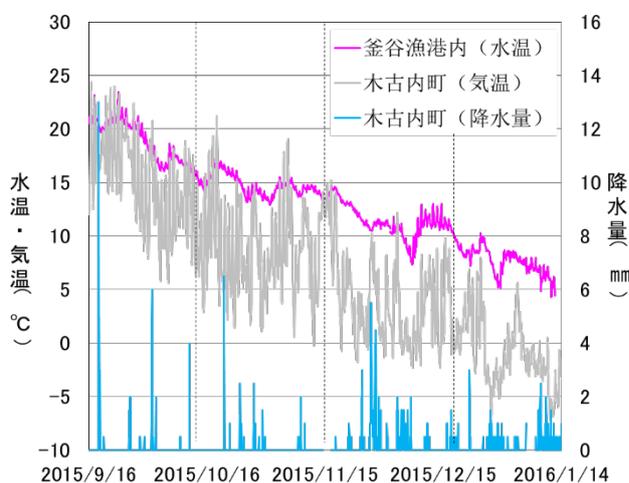


図2. 養殖漁場の水温の推移。気温と降水量はアメダスの気象データを利用。

### ○おわりに

北海道におけるヒジキ養殖の研究は始まったばかりで、まだ問題は山積みです。資源を有効に利用するため、今後は天然群落の調査にも着手する予定です。木古内町のヒジキ事業成功に向け、また水産業への貢献のために今後も地道な調査研究を続けていきたいと考えています。

### ○引用資料

- ・福原英司：北海道におけるヒジキの分布について. 北水試月報, 16:76-78. (1959).
- ・伊藤龍星：褐藻ヒジキ *Sargassum fusiforme* の挟み込み養殖と人工種苗生産に関する研究本. 大分県農林水産研究指導センター研究報告. 水産研究部編, 3:21-56. (2013).
- ・木下虎一郎：奥尻島の海藻概観. 北水試旬報, 293:925-927. (1935).
- ・気象庁ホームページ (<http://www.jma.go.jp/jma/menu/menureport.html>).
- ・吉田忠生：新日本海藻誌, 日本産海藻類総覧. 内田老鶴圃. (1998).

(北海道立総合研究機構函館水産試験場 前田高志、渡島地区水産技術普及指導所 本前伸一)